

アフリカの人々と名付け 39

性と生まれ順による名付け

小馬 徹

連載第22回にも述べたように、世界各地に見られる多様な家族はいずれも、思い切って言えば①血族／姻族、②世代、③直系／傍系という単純な区分の組み合わせに基づいて構成されている。最近の何回かの連載では、その中でも①②を中心としてアフリカの名付けを眺めて来た。ここで少し視点を変えて、今回からは③に注目してみよう。言うまでもなく、系を決定するのは性と生まれ順という先天的な要因である。

太郎、次郎、三郎

まず、日本の慣行を例として考えると分かりやすい。

三次達治は、「雪」〔『測量船』〕と題する有名な短詩で、「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪降りつむ／次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪降りつむ」と詠った。勿論、太郎も次郎も、提喩（synecdoche）として日本の男の子全体を表している。これが提喩たりうるのは、太郎、次郎、三郎……という、生まれ順に基づく男の子の命名がかつてわが国で広く行われていたという共通認識のゆえである。

とはいえ、少なくとも近世以降は、性と生まれ順に従って男の子たちを命名するのがわが国の一般的な命名慣行であったとは必ずしも言えない。徳川時代後期の江戸の人々は、次節で紹介する八丈島の命名法を奇習と見てそれに強い関心を抱き、各種の記録や記事を残している。それらによると、八丈島では男子ばかりでなく、女子も生まれ順に応じて一定の仕方でも命名されていたのである。

『甲子夜話』によれば、肥前平戸藩主である著者松浦静山も、江戸へやって来た八丈生まれの姉妹を江戸市中で目敏く見つけ、手を尽くし

て料亭に招待しようと試みた。また、滝沢馬琴の『椿説弓張月』では、主人公源為朝は八丈の娘（男の島の七郎三郎の）にょご（長女）と結ばれるが、彼女は八丈島における女子のそうした命名慣行の実際とその存在理由を為朝に語り聞かせている。これらの逸話からも、生まれ順による命名が近世の江戸では既に一般的ではなかった事情が窺われよう。

八丈島の命名慣行

諸書の記録を校合すると、八丈島では男子は生まれた順に、タロウ（太郎）、ジョウ（次郎）、サボウ（三郎）、ショウ（四郎）、ゴロウ（五郎）、ドクロまたはロクロ（六郎）、シッチョウ（七郎）、ハッチョウ（八郎）、クチョウ（九郎）、ジッチョウ（十郎）と呼ばれていた〔鈴木棠三『言葉と名前』、1992〕。

一方女子も六女までは同様に、ニョゴ（女子）、ナカ（仲）、テゴ（手児・程子）、クス、ジイロウ（女郎、上臈？）、クウロウと呼ばれたようだ。その先を挙げる記録もある一方、上記の名前も五女辺りからは異説がある。なお、三女を姉妹の標準の数と見て、長女を姉子、次女をナカ、三女をテゴと呼ぶ地域が八丈以外の日本各地にもあった。これらは、『平安遺文』から窺える「姉子・仲子・三子」、『鎌倉遺文』に見える「姉子・二子・三子…」という命名法と並行する慣行だと見られよう〔前掲書〕。

そして、どの家の男子であるかを特定する必要があれば、親（例えば五郎）の名前を先に付けて、五郎太郎などのように呼んだ——江戸時代初期の京都の豪商、茶屋四郎次郎の名がすぐに念頭に浮かぶだろう。更に特定するのなら、親の名前の前に在所の地名を加えた。先に触れ

た『椿説弓張月』の為朝の妻、男の島の七郎三郎のによごがその好例である。

なお、八丈島に類似する命名慣行が他の伊豆七島にもあったとする記録も散見される。

生まれ順名の論理

鈴木棠三は、八丈島の男子ばかりでなく女子にも本名があった事、生まれ順による「序列名」が一種の通り名である事、さらにテゴ、ジイロウなどの女子名は愛称が「序列名」に転用されたものである事を指摘している。そして八丈島のように外部との交流が乏しい小さな地域では通称で万事事足りるし、また女子では本名の変異がごく乏しかったがゆえに、愛称を「序列名」として済ませたのだと推測している。更に、八丈のこうした慣行を、いわゆる周囲説的な考え方から残存形態として捉えた〔前掲書〕。

ただし鈴木は、このように生まれ順による定式化された命名に見られる直系・傍系の区別意識の強さという、平凡だが人類学的には重要な事実には考察を及ぼしていない。

人類学の出自理論は、非単系集団の一つとして、出生順に基づく地位の位階制を伴うラメージ (ramage)、または円錐型氏族 (conical clan) と呼ばれる類型を想定している。ラメージは、アフリカ南西部にも存在する事が知られるが、生まれ順による「序列名」がそこで用いられているかどうかは明らかではない。

アフリカの生まれ順名

西アフリカのフルベ人は、イスラム化した現在ではイスラムの聖人名を命名に用いる事が多いが、赤ん坊の性と生まれ順に従って定式化された伝統的な名前を用いる事も少なくない〔小川了「固有名詞と社会関係(西アフリカ)」、『現代のエスプリ別冊一言語人類学』、1984〕。ただ、それぞれの名前には「同じ価値をもつ」幾つかの変異形がある〔江口一久「西アフリカ・フルベ族の名づけ」、『月間言語』19(3)、1990〕。

ガーナのアカン人は、生まれた曜日に因む名前と、生まれ順に因む序数由来の名前の二つを組み合わせて命名する場合が多い。ただし、両タイプのどの名前も両性間で変異する。こうした場合、名前を聞いただけで、その名前の持ち主がアカン人である事ばかりでなく、その人の性、生まれた曜日、生まれ順が分かる。例えば、アクア・マンサーは第三子として水曜日に生まれた女性であり、クワク・メンサーなら同じ状況で生まれた男性である。それゆえ、ガーナ独立の父とされクワメ・ンクルマが第九子として土曜日に生まれた事が知れるのだ〔高根務「アカンの人々の命名法」、松本脩作・大岩川嫩(編)『第三世界の姓名』、1994〕。

フルベの生まれ順名

アフリカで、赤ん坊の性と生まれ順に則ってなされる命名の実態と、その社会・文化的な意味が最も綿密に報告されているのは、おそらくフルベ人であろう。

まず、その出生順による男性名を列挙しよう。

①Dikko、または Hammadi、②Samba、③Damba、④Yero、⑤Paate、⑥Njobbo、⑦Delo。女子の場合は、①Dikko、②Kumba、③Penda、④Takko、⑤Daadoとなる。男女どちらも①から⑤までの名前を耳にするばかりで、男性の⑥や⑦の名前は稀である〔小川、前掲書〕。

だが、男性には七男までの名前が用意されているのに対して、女性には六女から先がないらしいのは注目に価する。これは、先に見た八丈島でも十男までの生まれ順名があったのに対して、女性では五女辺りから不確かになったのと、奇しくも符節が合っている。

小川は、長男と長女が同名である事と共に、一夫多妻のフルベ社会では、各妻にとっての子供の生まれ順がこの命名法の基準となるが、それは厳密ではなく、夫の視点からの命名もあり得る事に注意を促している〔小川、前掲書〕。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)